

CCDN 所長の交代と副所長の新生について

新副所長 Dr. Schwary の横顔

百田光雄 (日本原子力研究所)

CCDN のニューズレター 46 に報じられているように D.W. Colvin 氏は CCDN の所長としての 3 年の任期を了つて、この 7 月に後任者 V.J. Bell 氏に職を引き継いだ。

Colvin 氏は英国ハーウエルで核分裂の速発中性子の数の精密測定を行つていた実験家であるが CCDN の初代所長に迎えられてからは、その創業のために熱情を傾け異常な努力を続けてきた。国際協力という歩調のあわせにくい環境の下で、三年間の短年月の間にデータセンタの仕事が軌道に乗つたのは Colvin 氏個人の能力と努力と負うところが大きかつたであろう。CCDN が創設期を了えて次の段階に入ろうとしているときに同氏のように有能な人を失つたことは残念なことであつた。

後任所長の Bell 氏は同じく英国の人で、有名な断面積作成プログラム GALAXY の作成者の一人であり、最近の 3 年間はイスブラの ENEA 計算プログラムライブラリに所属していた計算の専門家である。従来 CCDN の計算機は必ずしもよく働いていなかつたようであるので、同氏によつてこの点は大いに改善されることと期待される。

所長の交代と同時に新しく副所長の椅子ができて、これにはスエーデンの Stephan Schwarz 氏がすわることになつた。同氏は本年九月東京で行なわれた核構造の国際会議への出席を兼ねて来日し、われわれと CCDN の間の理解を深めていつた。同氏は CCDN NEWSLETTER の第 3 号の ${}^6\text{Li}(n, \alpha){}^3\text{H}$ 断面積 ($1 < E_n < 600 \text{ keV}$) の評価に関する報告からもわかるようにストックホルムの Research Institute of National Defence で彼自身この断面積の測定に従事した。その後 CCDN に consultant として参加し、SCISRS の中に収集されているこの反応に関するあらゆるデータを比較検討して得られた結果がこの報告である。彼はこのほかに中性子検出器に関する研究と、中性子の関係する核反応の研究を行なつている。年齢は 30 代の前半と見受けられるが、なかなか有能な実験家のようである。新所長の Bell 氏が計算機の側の人であるので、この正副所長は組み合わせの妙を得たというべきであろう。大いに活躍し、CCDN の名声を高めてもらいたいものである。

☆☆☆☆☆☆☆☆